

傘寿を迎えて

2024年1月1日

1 / 3

傘寿ともなると体力・知力の低下を自覚させられるが、人生を振り返る余裕も出てくるものだ。

1964年東京でオリンピックが開催された時、大学2年生で土木工学を学んでいた。大学を卒業後は地盤工学の研究をつづけながら高度成長時代の高専、大学の教員として社会基盤整備技術者の卵を世に送り出す人生であった。

大学の同期生達も、社会インフラの建設整備事業に役所やゼネコンやコンサルタント等で今では死語である「猛烈社員、企業戦士」として高度成長期を支え続けた者がほとんどである。今日では労基法違反であろうが、当時は当たり前と思って働いたのが我々の世代であった。物故した者も多いが、一線を退きやっと趣味を見出した者、足腰の衰えで動けなくなる者、軽度認知症になった者もあり、最近は交流も途絶えがちになっている。

思い起こせば、1990年代以降残念ながら日本の社会インフラは強靱化されずに、国力も低下する状況が続いていた。さらに、この数十年の経済の停滞がこれからの日本の国際的影響力のさらなる低下につながるのではないか危惧するところである。

大学を出てからの60年の間、世界、日本、社会、技術は驚くほど変化したが、人間の行動はほとんど変わらないものだとも感じている。緊張状態にあった冷戦は終わったかに思えたが、今また世界は国土・国境紛争、宗教民族闘争が起こり、さらにエネルギー、食料、資源の確保で新たな対立が始まっている。人類が安心安全な幸せを求め、お互い共存できる世界は遠のいているのだろうか。

幼少時代

幼少から小学生時代（～1956）を鹿児島県の川内市で過ごした。当時まだ川内川上流の鶴田ダムは完成しておらず、ほぼ毎年川内川が氾濫し、自宅を含む多くの住宅が床下、床上浸水を被る状況にあった。家の周囲は一面の洪水、小学校は数日間休みとなり、家で水位の上下する速度を測りながらなぜか楽しかった思い出がある。

中学、高校時代は鹿児島市で過ごしたが、洪水こそなかったもののほぼ毎年来襲する台風被害、シラス台地特有の土砂災害、都市周辺の開発に伴うがけ崩れ等の被害（毎年かなりの死者を伴っていた）が頻発していた。これらの体験から、いつしか土木工学を学んでみたいと思うようになったようだ。

鹿児島高専時代

大学院を修了して建設現場で働きたいとの夢を持ってはいたが、どういうわけかそのまま設立して間もない鹿児島高専の教員になり、教育研究者の道を歩むことになった。そこで13年間南九州に分布する火山灰土「シラス」の破壊機構に関する研究を行った。

一番記憶の残っていることは、1973年第8回国際土質基礎工学会議（モスクワ会議）に「地山シラスの脆性破壊機構」の研究論文を発表したことである。この研究は土質力学体系に岩石力学体系を導入したものとして高く評価された。国際会議終了後は日本の地盤工学研究者のグループに加わり、ヨーロッパ各地の地盤関係の研究所（ドイツ、ノルウェー、スウェーデン、オランダ、スイス、イギリス）を1か月かけて視察した。29歳の時であったが、当時はソビエト通貨1ルーブル300円超、1ドルも同じく

傘寿を迎えて

2024年1月1日

2 / 3

約300円(1971年までは360円の為替固定レート)の時代であり、給与10万円弱の身にとって約100万円の出費を借金で賄っての挑戦でもあった。この体験は自分の人生目標を定めさせるに余りあるものだったと思っている。

この国際会議から帰ってから、他人に批判的なことを言われようと研究を続けながら若い技術者を世に送り出すのが自分の使命だと自覚することに自信が持てた。なんせ、当時高専は高度成長時代の早期人材養成機関として設立されたので、「高専の教員は研究が主務でない」、「卒業生は公務員にせず企業に送り出せ」と言われていた時代だった。研究活動を通じて自分を磨き、土木を学んだ学生を彼らの性格も考慮して発注者(役所)、ゼネコン、コンサルタントにバランスよく送り出すのが使命と思って励んでいた。しかし、なぜか自分は周囲から異端児扱い(教員らしからぬ教員)されていた記憶がある。その間、悔しい思いを何度も味わったが、大学時代の恩師の励ましが大きな支えとなり、自分の道を歩めた。

その後は、自分なりに科学研究費を獲得しながら教育研究活動を続け、九州大学に1年間客員研究員として滞在する機会もあり、博士論文を完成できた。学位取得後はカリフォルニア大学デービス校に1年間(1980~)ポスドクとして留学する機会もあった。高専の教員時代、全力投球で教育研究活動に取り組んでいたのが幸いしたのか、あとで分かったことであるが学生には結構慕われていたようだった。高専の卒業生は建設業界で指導的責任ある技術者として活躍した者も多いし、また私の研究室出身者が大学の教育研究者として活躍した者も多いのは私の誇りでもある。

山口大学時代

縁あって1982年、山口大学工学部に助教授として招かれ、40歳で教授昇任、研究室を運営するに至った。大学に移ってみると、教員たちの研究に対する姿勢はさすがと感じたが、自分が想像していたところとは違う状況も見えていた。まずは、研究力はあるが将来を見通す力や広い視点に欠けている先輩教員・構成員が多いと感じ、少し期待外れの感を抱いた記憶がある。そこで、自分の働く環境は自分で向上させるとの考えが芽生えた。まず、自分の研究室、次に自分の所属する学科、次に学部、大学の順に誇りが持てるような組織にすることが一番との思い至り、周囲を啓発しながら教育・研究・運営活動を行った。

このころから、企業から研究室が奨学寄付金を受け入れることができる制度ができ、いくつかの企業からの寄付金をいただき、研究活動に回すことができたことには感謝している。

山大では、地盤工学の発展と地域の活性化に貢献できることを念頭に置き、「土の構成則」、「真砂土や破碎性土の研究」、「盛土、切土斜面の安定性の研究」に取り組んだ。特に、頻発した西日本の国道、高速道路の盛土斜面や地山斜面の崩壊、土石流災害の原因究明・対応策検討にほぼ毎年携わり、高盛土建設時の地下排水の対策法を提案し、現在では指針となっている。

研究室、学科がそれなりに全国的にも評価されるようになった後は、山口大学自体の向上が必要との思いから、学部運営(学部長)、廣中平祐学長の招聘(副学長として補佐)、大学の運営(理事・副学長)に携わることになった次第である。

傘寿を迎えて

2024年1月1日

3 / 3

大学人は世間から一目置かれているようではあるが、実際は「研究に没頭するあまりか、世間・社会とかけ離れ人達（皮肉交じりの言）が多い」と認識され、実社会では通用しないと聞くことも多かった。そこで、大学と社会との協力連携活動を積極的に行うことが必要、つまり、産官学の連携の強化、大学発の技術の社会移転の推進等は大学の使命の一つであるとの考えに基づき運営にあたった。その結果、山口大学の社会連携活動は全国モデルとして評価されるようになったと自負している。地域共同研究開発センター、ベンチャービジネスラボラトリー、技術移転機関TLOを全国に先駆けて設置できた。今では、特に地方の大学の使命は産学官連携活動の推進や地域の活性化に貢献することであるとされているが、当時はこのような活動に対しいろいろな抵抗も少なくなかった。

2000年代以降、大学を取り囲む環境は厳しさを増し（国立大学法人化等）、大学の運営に専念した分、研究時間を削られることになり研究者としての自己満足的成果を失うことになったが、後悔はほとんどなかった。廣中学長の副学長を務めたころ、廣中先生の友人の一人である稲盛和夫氏と3人で2回ほど会食する機会があった。稲盛氏は私の住んでいた隣町（鹿児島市薬師町）出身で、鹿児島弁調で「利他の心」を説かれたのが印象に残っている。

振り返ると、私が「歴史と人生は変革との対峙にある」思い続けた背景には、大学院修了後13年間の鹿児島高専時代の研究活動、反抗期の学生を育てた教育活動の経験・体験があり、私のその後の「活動の源」となっているといえる。

大学を退任した後、宇部建設コンサルタントの会長として社会インフラの構築・維持事業に携わらせ続けていただき、土木屋として人生を全うできたと感謝している。

例えば、山口に引っ越してきた時代（1980年代）、県内のコンサル、ゼネコンの規模が他県に比較して小さいことに違和感を覚えたが、山口県の地政学的な位置関係によるものだろうと想像した時もあった。今や日本の国力upは地方の活性化（地方創生）抜きにはありえないと言われる時代にあるが、日本の国際競争力は落ち続けている。この10数年に県内コンサルタントの技術力・対応力が上がり、社会インフラの整備維持強靱化事業や災害復旧事業の一端を担い、地域の活性化に十分に寄与していることは本来の姿である。我々インフラ整備技術者はこれからの日本の国力向上に尽力しているとの誇りを持ち続けてもらいたいと願っている。なお、これらの活動は個人（技術力）と組織（共同力）の両者がかみ合っこそ達成成就されるものと認識しなければならない。

村田 秀一